

中国人指導者から見た日本のバレーボール

—回顧と展望—

孫 正衛*, 河野貴美子** (翻訳)

I. 前 言

過去50年間に渡り、中国と日本のバレーボールは、紛れもなく常にアジアの最高レベルを代表するものであった。アジアのバレーボールは、かつて世界のトップにも輝いていたが、とりわけ女子バレーボールにおいては、60～70年代は日本女子、80年代は中国女子が、長期間に渡り世界に覇を称えた。男子の成績はこれに比べればやや劣るものの、日本男子バレーボールは1972年のミュンヘンオリンピックで金メダルを獲得し、中、日、韓三国の男子バレーボールは70～80年代にかけて、速さ、変化、機敏さという持ち味で、欧米のトップチームをたびたび苦しめ、世界の強豪チームに肩を並べてきた。惜しむらくは、1988年のソウルオリンピックで中国女子バレーチームが金メダルを逃した後、アジアのバレーボールは不振の一途を辿り、今に至るまで回復の兆しが見えないことである。アジアのバレーボールが、男女を問わず世界の二流、三流に落ち込んでしまっているのは争えない事実であり、昔の栄光を思うと、全く残念でならない状況である。もし今、我々がこの不振の原因を深く追究することなく、適切で有効な手段をもって修正を加え、先を追いつくしなれば、今後も相当長い期間に渡り、我々は世界との差を広げられ、ますます追いつくことは難しくなるであろう。同じアジアの人間として、中日二国の我々は、さらに高いレベルで結束し、それぞれ国の榮譽のために競争するとともに、交流を深めていかねばならないだろう。中日二国のバレーボール界の精鋭である面々は聡明な能力を有し、また二国の人民はみな我慢強く誠実に努力することで知られる。とすれば、この二国が協力し、互いに長所を取り短所を補い合い、レベルアップを図っていけば、互いに門を閉ざして各々の道を進むよりも、得るところはきっと多いはずである。

実際、中日バレーボール界の交流と協力は長い歴史を有し、また多くの成功を収めてきたものである。特に60～70年代、当時世界の覇者であった日本女子バレーボールの大松博文監督は、理論面においても実践面においても、中国女子バレーボール界に多大な貢献を果たした。大松監督のこの行為の歴史的意義は計り知れず、国境や民族を越えたこの手助けあってこそ、中国女子バレーボールは80年代に急速に飛躍することができたのであった。中国バレーボー

ル界にとって大松博文監督は忘れることができない存在である。故周恩来中国元首相も大松氏は中日友好の使者であり、中国人民の永遠の友人であると称えている。

II. 私と日本のバレーボールとの出会い

60年代初め、私がバレーボールを始めた時、日本女子バレーボールは世界の頂点に登りつめたばかりであった。そして64～65年、ニチポー貝塚女子バレーボールの姿を目の当たりにした。当時大松氏がチームを率いて中国を訪れ、試合のみならず、日本チームの練習を公開し、自ら中国選手の練習も指導したのである。日本選手の変化球サーブ、華麗な回転レシーブ、想像を絶するほどの柔軟でかつ強力な協調性。これらは人体の潜在能力を余すところなく発掘したものであった。当時日本の女子バレーボールは、ネット上での攻撃能力はソ連に及ばなかったものの、守備から切り返して攻撃する技術の高さは空前のもので、いかなるチームとの戦いにおいても打ち破られることはなく、ラリーの応酬に勝利するのは彼女たちなのであった。当時の選手には、河西、磯辺、佐藤などがいたが、日本女子バレーボールの台頭は、バレーボールの客観的規律に対する深い認識の上に立つものであり、世界に向けて斬新かつ革命的な指導理論を見せつけたのである。大松氏以後の日本女子バレーボールは、伝統を継承しつつも、山田氏や小島氏によってさらに多彩な攻撃戦術を加え、また新たな段階へとステップアップしたのである。

その中でも指摘しておかねばならないのは、日本女子バレーボールが先進的な技術戦術以外に、世界をリードできたさらに重要な原因が、とりわけ厳格な組織規律と、監督の絶対権力と威信、選手たちの絶対服従が徹底して行われたためであったことである。これは中国の軍隊よりも徹底的に100%の命令服従を要求するものである。こうした保証があってこそ、多大な運動量がわずかの妥協を許すことなく完全に実施され、監督の戦術に関する指導理論も徹底的に貫かれるのである。日本選手のこうした忍耐強く逞しい気質は、彼女たちの試合や練習を見る者全てに舌をまかせた。当時、世界中のどの国の選手もここまでは徹底することができなかった。そして、この忍耐力を長年に渡り積み重ねることによって、日本女子バレーボールは「量」から「質」へと転換し、飛躍的にレベルアップしたのである。この状態は、河西選手らから白井貴子、横山樹里らの世代へと、十数年受け継がれ続けたのである。しかしその後、広瀬、江上、三屋、廣、大林らは、それまでの輝きを

*上海男子チームコーチ

**東京都立晴海総合高校

再現することはなかった。

60年代中期の日本男子と中国男子はほぼ同じレベルであった。1965年の中日対抗では、中国がやや優勢であったが、66年に中国では文化大革命が始まり、バレーボールチームは練習を中止し、レベルは降下した。逆に日本は、松平氏、斎藤氏の指導により飛躍的な突破を遂げ、1972年のオリンピックで金メダルの栄誉に輝いたのである。1974年、松下電器男子バレーボールチームが中国を訪れた際、私はこの目で横田、木村、野口といったオリンピック金メダリストたちの素晴らしい技術を見た。松平氏の「機関銃に大砲を加える」戦術には極めて強い印象を与えられた。また、猫田、大古、森田、南らの堅実な基本技術、各選手の高度な守備能力、多彩で正確、かつ有効な速攻コンビネーションは、当時のバレーボールの完璧な理想像を示していた。しかし日本男子バレーボールの栄光は、女子ほどは続かず、その後の田中、奥野、花輪、杉本、三橋から中垣内らに至るまで、全日本男子選手は彼らの先輩のレベルにまでは達しなかった。しかしいずれにせよ、大松氏、山田氏、松平氏の指導、采配は私にとっていつまでも崇拜の対象となっている。こうした影響を受けたことで、私は以後日本に渡り、筑波大学の朽堀教授の指導のもとに研修を深めることを決意したのである。

朽堀教授の丁寧な御指導のもと、日本で学んだ三年近くの間、日本のバレーボールに対してより理解を深められたのであるが、私にとって特に印象深かったのは、以下の点である。

1. 日本のバレーボール普及率は世界第一を誇ること

日本の小学校、中学校、高等学校、大学の多くはみなバレーボールチームを持っている。しかもその基本技術はしっかりとしたもので、レベルはかなり高い。かつて茨城県高等学校リーグ(87年)を観戦したが、あれほど多くの学校代表チームが一堂に会して競技を行い、また、そのレベルが高いことに非常に驚いたものである。近年サッカーが一部の青少年の心を引きつけてはいるが、日本の若者世代におけるバレーボールの普及率はやはり世界で最も高いものであろう。日本の小学校、中学校、高等学校、大学のバレーボールリーグ組織はきちんと整備されており、これは他の国とは比べものにならない。中国にいたっては、人口は多いものの、バレーボール人口は大変少ないと言わざるを得ない。

2. 日本の各層におけるチームの指導者のレベルの高さ

日本は小学校から大学、企業、ナショナルチームにいたるまで、監督、コーチはほぼ100%大学出身、もしくはそれ以上の学位を有している。先に触れた茨城県の多くの高等学校の監督は、本人自身のバレーボール技術はともかくとして、指導者としてのレベルは軒並み高いものであった。これは彼らの指導を受けた選手の基本技術や、戦術意識から容易に見て取れることである。筑波大学を例にあげると、朽堀申二教授、福原祐三教授、都澤凡夫教授の指導レベル

は相当高く、彼らはみな企業チームやあるいはそれ以上のレベルのチームを率いたとしても、全く問題はないものと確信できるほどである。日本にはこのようなハイレベルの指導者が多く存在することも、日本を優勢にしている一因である。

日本には大量の「バレーボール人口」があり、またハイレベルのコーチングスタッフも多い。では日本のバレーボールは、なぜ輝かしい戦績を残した後、長きに渡って不振が続いているのであろうか。一人の外国人として、また、日本のバレーボールに関心を寄せる第三者として、私は客観的立場からおおよそ以下のようにその原因を分析する。

① 60年代以前、欧米の高さはアジアを圧倒していたが、しかし大松氏は相手を何倍にもしのぐ守備能力と、変化のある速攻でもってこの劣勢を打開し、アジアを世界の強豪の仲間押し上げた。が、時間の流れとともに、日本、中国、韓国の指導者が世界へ赴き(米田アメリカチームコーチや金万福ペルー監督など)、欧米の強豪チームもアジアの技術戦術を次々と学び、彼らの守備レベルは「小さく、早く、機敏な」アジアの選手をも超えるようになった。彼らがオープン攻撃の他に、アジアの速攻や変化を織り交ぜてきたのに対し、我々の強打やブロックはそれを超えることはなく、その結果、この十数年間、アジアの各チームが再び欧米に追いつかなくなったことも怪しむには足りない。従って、いかにしてアジアのチームに適した道を探し出し、再び現在の状況を打破していくかは、日本のみでなく、中国、韓国にとっても、眼前に立ちだかる課題なのである。では、アジアの選手の高さや力が、短期間の内に欧米のチームを超えなければ、アジアのチームに前途はないのだろうか。そんなことはない。先だって、上海男子チームはロシアを訪問し、代表チームと三試合戦った(2000年)。初め相手は上海チームを軽視していた。上海チームの出来も悪かったが、相手のスターティングメンバーは全員2m以上で(最高2.08m)、身長も高く手も長く、ジャンプ力もあり、スパイクは重く、上海チームは高さに対応できず、加えてそれがプレッシャーとなり、初戦はストレートで敗れてしまった。二試合目、上海チームは平常心を取り戻し、サーブレシーブを安定させ、速さと変化のバランスをもって戦った。上海チームの平均身長は10cm以上も劣っていたが、速攻と移動攻撃、及び的確なブロックによって、相手は上海チームのブロックの上からスパイクを打ち下ろすことが出来ず、逆にストレートでその試合を取り返すことが出来た。また、Bチームとの試合も、上海チームはストレートで勝利を収めた。上海チームの戦いぶりはロシアの記者の好評を得、新聞紙上には「チャイニーズドラゴンがロシアのオオタカを一口にした」と称賛されたのである。この試合を通じて上海チームは、正確な戦略、相手に即した戦術、正確な速攻と変化を備えた戦術をもってすれば、欧米チームを下す道は開けるものと教えられたのである。従って、日本と中国の現在の不振の原因は、全て正確な対策が探し出されていないことにあるので

ある。

② この30年間、私は一貫して日本のバレーボールに注目してきた。日本の指導者の熱心で真面目な姿勢や、日本の各レベルの選手たちの、努力を惜まず、また絶対に服従するその態度、そして一生懸命練習に取り組む気持ちに、心から敬意を表するとともに、羨望を感じる。日本の男女バレーボールがかつて栄光に輝いた根本的な理由はここにあるのであろう。こうした気風がなければ、練習の質は保証されず、時間は全て無駄なものとなる。しかしこうした精神があれば、練習の質は保証され、試合にも勝利し、世界に威を示すことができるようになるのである。残念なのは、この十年間、指導者たちは変わらず真面目に努力しているにも関わらず、日本の選手の多くが、以前に比べ、練習に対する真面目さや、絶対服従の態度に劣る傾向にあることである。これは93年から97年にかけて、上海青年女子選抜チームの監督を任じた際、毎年全日本高校選抜や日本の青年チームと試合を行ったことから、深く認識するものである。中国の選手と日本の選手は、練習態度、真面目さ、努力、忍耐力の程度が大きく異なること、そして、現在もその状況は変わらないことをここに指摘しなければならない。敢えて率直に言うが、日本のバレーボールの成績が落ち込んだ原因の多くは、ここに根本があると思われる。絶対服従、たゆまぬ努力は、日本民族の依って立つ根本であり、これを放棄してしまっただけでは、日本の選手たちはその重要性に果たして気がつくことが出来るであろうか。私は日本のバレーボールに触れ、かつて日本の指導者のもとで学んだ、日本バレーボール界の「親友」として、本当の事を述べてこそ、真の友になれるものと思うのである。

③ 日本のバレーボール界には、科学的研究の力が大きな支えとしてある。とりわけ大学や書店にはバレーボールに関する専著も多く、学術的な傾向は強い。こうした点で中国は日本には及ばない。しかし私は、科学研究と実際のトレーニングの間には食い違う点があると日頃から感じている。科学的研究課題は指導や練習には直結していかない。中国にも類似の問題は生じている。

④ 私は、日本のバレーボール選手の体力トレーニングには若干の問題があると常に感じていた。日本チームの柔軟な強さ、敏捷性は優れているが、パワーはそれほどでもない。特にジャンプ力は他に比べ劣る。日本の男子チームで従来最高到達点が3.50mを超えるものは少なく、女子でも3.10mを超えるものは少ない。この原因究明は研究に値する。私がかつて指導した上海女子青年チームには、最高到達点が3.28m, 3.26m, 3.16mの選手がいた。現在の上海男子選抜チームには、3.62m, 3.60m, 3.58m, 3.55mのものがおり、身長が1.87mの選手も3.50m, 3.48mに到達している。ナショナルチームの鄭亮選手はかつて3.73mにまで届いていた。身体資質からすると、中日の青年は高さにはさほど差はない。ナショナルチームや企業チームにおけ

る身長差も大きくはない。しかしジャンプ力の差は明らかである。日本チームが仮にジャンプ力において大幅にレベルアップができなければ、世界の先進的なレベルを追い抜くことは現実とはならないであろう。

III. 提 言

いかに方向を見定めて、一步一步努力していくかということが、下から上がっていくときにはより大切であろう。アジア人の特徴に合った道を探し出し、高さのアップ(身長、ジャンプ力)、すなわち「大型化」を図ると同時に、さらに堅実で全面的な技術でもって速さと変化と正確さを磨き、有効な戦術をもって欧米と戦うことが、現在の中日両国の重要な課題ではないだろうか。これは全て練習によって達成されるものであり、練習においていかにして根本的な革命、改革を行っていくかについては、多くの中日バレーボール界の有識者たちによる研究と探究が必要である。私は、両国の協力はきっとそれぞれの国の力を上回る大きな力となるものと考えている。

したがって、以下の提言を行いたい。

- ① 両国のバレーボール界の要人が交流と討議を重ねること
- ② 両国選手(企業、クラブチーム)が対抗試合を多く行い、指導者が互いに理論や経験、各自の研究課題について交流し合うこと
- ③ 指導者を互いに派遣し合い、指導、研究を積むこと
- ④ 選手やあるいはチームを派遣し、双方のリーグ戦に参加し、互いに長所を取り短所を補うこと

IV. 結 語

以上が、日本バレーボールに対するささやかな個人の見解である。認識の狭さと偏向は免れないが、ただ、これをお読みになる方々には、一人の日本バレーボールを真に思う友人の率直な気持ちだとお許しいただき、また、誤った部分に対してはどうか批判訂正をいただければと思う。日本チームが新たに鮮明な特徴を打ち出したチームとなり(大松氏が松平氏が率いたチームは、みな突出した特徴を備えていた。敵にあるものはこちらにもあり、敵にないものもこちらにはある、という状況であった)、そして、現在の何の特徴的な印象もない状況を脱し、世界の強豪へと返り咲いてほしいと心から願うものである。

同時にまた私は、一人の中国人バレーボール指導者として、中国チームの栄光の再現をさらに願っている。中国チームの歴史と現状についても、もちろんいろいろな考えがある。機会を改めて再び述べたいと思う。

文章力もなく、ただ個人的な考えを示したのみであり、普通の指導者の発言がそれほど大きな影響力を発揮できるわけでもないが、ただ、中日両国のバレーボールのトップにある方々が大きな方針を決定するときに、多少の参考になれば幸いである。